

天の川原（二）

つちだりゆうたらう
土田龍太郎

かの在原業平朝臣、文徳天皇の一の皇子惟高親王に仕へまゐらせしさまのいとまめやかなりしこと伊勢物語につばらに説きたれば、知らぬ人としては少かるべし。

山崎のあなたなる水無瀬にこの親王の宮ありて、春ごとにかしこにまかり花をめ、さらにそのかみはまだ禁野にてありし交野に狩りくらすをならひとしたまひけり。

かかるをりつねに供しまゐらせし右の馬の頭のこと、物語の作者はおぼめかして名をだに知らぬやうに言ひなせれど、これ異人ならず在原業平朝臣を指せるにまぎれなきなり。さるはこの朝臣、世に在五中將と呼びならはしたれど、元慶二年右近衛權中將に遷れるに先立ちて貞觀七年には右馬權頭に任ぜられしこと國史をけみして知るをうべければなり。

ある年の春、親王交野に出でたまひけれど鷹野にはさまで心を入れたまはず、渚の院といふところにてをりしもおもしろく咲ける櫻をめつつ人々に歌詠ませ遊びくらしたまふことありけり。この時に右の馬の頭の詠みける

世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし

といへる一首、咲くを待ちかね散るををしみて一息に述ぶるわざげにこよなし、巧まずして巧めりと言ひつべければ、櫻を詠める大和歌の今に遺れるが中にこれにまされるものをさをさ見出しがたきなり。

日やうやく暮れがたになりゆけど、水無瀬にはただは遷らで、天の川原といへるところに息ひたまひけるが、この時同じ馬の頭、親王に大御酒まゐらせむとせしに、交野を狩りて天の川のほとりに至るを題にて歌詠みてさかづきはさせと宮のたまひしかば、とりもあへず

狩り暮したなばたつめに宿借らん天の川原にわれは來にけり

と詠みたてまつりける。をりからぬあはせたりし紀有常のつかうまつりしこの歌の返し、さても拙からぬどもここに引かずともありなむかし。

交野の近くにありけむこの天の川原、そのかみのはつかなるなごりだにも今に遺れりや、はたあとなきまで變りぬるにや、ここに確めむにすべなきぞおぼつかなき。さはれ、ところのさまなべてのけしきなにとやらむうき世に遠き心地のせられたればこそこの水のほとりを天の川原と名づけたりしにてもこそありけめ。ただ思ひやるほどにいとどゆかしさつのりゆくめり。

同じ川原を詠める歌ほかになきにあらず。

戀しきにあはれ昔のおもかげを天の川原に宿してぞ見る

と源俊頼の詠めりしところ、淀山崎に遠からずとおぼしければ、かつて惟高親王のやすらひたまへる水のほとりに異らざること散木奇歌集の内の詞書より推して知らるるなり。

この水のほとりにて馬の頭、ところの名の同じばかりをかごとにて、天の川原にわれは來にけりと言へりとせば、ただこの作者に時にとりての譽れのみこそはしるかるめ、つひにはなほざりの戯れ歌にすぎざればさせる見どころとはあらむらまし。さはれ作者まことかの業平朝臣とせば、この一首さしもおろかなるあだごととも思ほえず、深きおもむきたえてなしとも言ひがたかるべし。

一日遊び暮せしその還りさまに、たまさかに憩へる水のほとりのけしきよしありげにて、ところの

名さへも天の川原といふなれば、この世の外に出でたらむ心地のふとまきとして、もしやまことにかの織女に宿からざらむもはかりがたく思ひなされむとせば、げにおもしろきことひとかたならざらまし。

もとよりところの名の同じばかりをたよりにて世の常の人のさながら天の川原に至らむことわりよもあるべからざるはいふもさらなり。かかる不思議なる心地ただ刹那ばかりこそまきさせ、次の刹那にははやうつし心にかへらでやはあるべき。かつまきしかつ消ゆるただ束の間の心のゆらぎはつかなることたとへむにものなし。

なべての人の言の葉もてはゆめとらふまじきこのはかなきおもむき、狩り暮したなばたつめの一首にこもりたりとせば、在五中将おぼろけの歌人のつらには數ふべからず、歌仙と仰ぎ尊び來たれりしはむべことわりなりとこそいはまほしけれ。

(令和二年六月二十七日受附)